

編集：山田浩司 & 美澄

Address: 2208 North Quantico Street, Arlington, VA, 22205, USA

Phone: 1-703-241-0621 E-Mail: mickeyy@pc4.so-net.ne.jp URL: <http://www.sanchai.net>

喪中につき、新年の挨拶は控えさせていただきます。

2002年11月20日午前4時過ぎ、祖母山田さつ江が永眠いたしました。99歳でした。22日に岐阜県池田町市橋の自宅にて告別式がとりおこなわれました。残念ながら私達は告別式には間に合いませんでしたが、22日夜に到着し、初七日のおとりこしまで実家で滞在しました。

急逝の知らせを受けたのはワシントン現地時間の午後4時頃でした。子供達を迎えに行った後、庭の落ち葉かきをしていた美澄は母からの留守電に暫く気付きませんでした。午後5時過ぎによりやく伝言再生し、すぐに私のオフィスに連絡を入れてくれました。私は、11月27日から取得を希望していた有給休暇が課長から承認され、JICAの事務所で一時帰国の申請を行なうために不在にしていました。オフィスに戻って留守電を確認せずに30分ほど経過した午後6時30分過ぎ、美澄から再度電話があり、祖母の逝去を知らされました。美澄がすぐに帰国便の手配に動いてくれたお陰で、翌朝出発も可能でしたが、あいにくこの時間帯は既に課長も副総裁も退席しており、休暇取得の手続がすぐに取りませんでした。また、翌日に日本からの来客との大きな会議を幾つか準備していたため、他の職員にバックアップをお願いしている余裕もありませんでした。現地時間20日一日を来客対応と次週のフィンランド政府との定期協議の準備引継ぎに充て、21日に家族全員で帰国の途につきました。

祖母の容態が芳しくないことは、母からのメールや電話での会話のトーンが10月半ば頃から少し変化していたので何となく感じておりました。当地では11月最終週が感謝祭の連休となるのを機会に、取りあえず私が単身で27日から1週間帰国して祖母の話し相手になろうと決めたのは15日のことでした。祖母と会うのもこれが最後かもしれないと考えていたところに届いたのが、祖母急逝が知らせでした。先述の有給休暇の申請はその一時帰国のためのものでしたが、祖母も考えていてくれたのでしょうか、あと1日連絡が遅ければ、27日の帰国便の発券と支払いを済ませていたところでした。

市橋に生まれて市橋の我が家にて天寿をまっとうできた祖母は幸せ者であったと私は思います。女性の平均寿命が50歳にも満たない貧しい国を相手にして仕事をしている中であって、祖母の長寿は同僚の誰もが驚きます。また、この業界で持続可能な開発を考えるにつけ、先達の知恵を次の世代、また次の世代にどう伝えるかは途上国でも大きな課題であるわけですが、市橋の歴史を最も長く見てきた祖母の知見を聞く機会を逃したことがとても悔やまれます。

この業界で仕事をしていれば、遠く離れた場所で家族の訃報を聞くことは当然覚悟しておかねばならないとは思いますが、でも、高校卒業して大学進学のために上京するまで、一緒に生活し、時に両親に叱られた孫の味方に常になってくれて、就職後も孫の帰省を心の糧にしてくれた祖母の逝去は、何か自分の中に大きな穴が開いてしまったような気がします。気苦勞の絶えなかった祖母にも安心して見守っていただけるよう、これからの人生を過ごしてゆきたいと思います。(浩司)

Go! Go! グリーン・ライオンズ アーリントン・サッカーリーグ無事シーズンオフ

アーリントン少年少女サッカーリーグは、11月16日を以って無事シーズンフィナーレを迎えた。連続狙撃犯騒ぎがあったり、天候不順で練習や試合がまともにこなせなかったりで、当初覚悟していたほど忙しくはなかったようには思う。勿論、ちゃんと会費を納めた身としては、元を取れるほど樹生にサッカーをやらせた実感は正直言ってあまりない。試合の度にドリンクやスナックの差し入れボランティアの当番があったり、リーグ戦最終日に子供達に配るトロフィーのお金とか、コーチ・ジョンに払う謝金とか、会費以外にも出費はあった。

サッカーに接するのが初めての我が「グリーン・ライオンズ」は、6歳児の多い相手チームに翻弄されまくり、最初の頃は途中で試合を投げ出してピッチ外で遊び始める子供が多かった。そのうちだんだんまともにボールを追いかけられるようになり、終いにはきちんと選手交代もこなしながら、得点さえ挙げられるようになった。最終日もあいにくの雨で、試合はキャンセルとなり、コーチ・ジョンの自宅で慰労パーティが開催された。子供達一人一人にトロフィーが授与された。シーズン初頭の子供達の無秩序状態を考えれば、サッカーを投げ出すことなく最後まで練習や試合に参加した子供達は表彰されるに値する。樹生も、他のチームメイトと同じく、トロフィーをコーチから手渡されてとても嬉しそうだった。勿論、それを支えた親も同様だ。我が子が最後まで一つの仕事をやり遂げた初めての記念品として、大切にしておきたいトロフィーである。

頑張るママ！受験勉強再開

授業終了後、8月いっぱい遊んで過ごしたのが良くなかったか、はたまた試験自体が授業の中で毎週行なわれていた小テストよりも難しかったのか定かでないが、「サンチャイ通信」第19号でご紹介した通り、美澄ママは11月1日に行なわれたマッサージセラピストの国家試験で、3点足らずで不合格になってしまった。3点及ばずだっただけでなく、クラスメートの殆どが同じ時期に試験を受けて合格していることもママにはショックだったようだ。まあ、8月から9月にかけて殆ど勉強らしい勉強をやっている様子になかったから、中だるみになって10月に入って勉強再開した時、既に忘れてしまっていた事項があまりにも多かった。ママが受験日を何度か延期する手続を取っていたことがママの焦りを物語っている。

本人の名誉のために付け加えると、9月にママが受験勉強に集中できなかった最大の理由は、パパの通信制大学院の期末レポート提出が何件かあって、そちらに時間を割く必要があったからである。国家試験の勉強とは別に、ママはそれなりにマッサージ関連の書籍を集めて、暇を見つけては読んでいるようである。マッサージの練習台もワシントン邦人向けウェブサイトの掲示板で募集して、時々無償でやっているし、「ケアファンド」という在留邦人が多く参加している現地NGOのマッサージボランティアにも登録している。お金を取るころまではできないけれど、それなりに着々と準備はしている様子だ。12月13日には、世界銀行に申請中だった就労許可も取れた。後は国家試験に受かるだけだ。

このような「癒し系」の仕事は、日本でも通用すると思う。既にそれなりの投資もしているわけだし、そのうちに私がJICAを退職しても食わせてもらえるようにならないかと密かに期待している。

早く着いてよチャールストン

ぐったり、夜汽車の一人旅

10月のスナイパー（狙撃犯）騒ぎのおかげで、志道学院剣道トーナメントが中止になった。上げた拳の下ろしどころを見失ったパパは、急遽11月2日（土）にサウスカロライナ州チャールストンで開催される南東地区剣連主催の剣道トーナメントへの参加を決意した。昨年ノースカロライナで開催され

た大会に出るのに車を7時間も運転して家族連れで行って不興をかった反省に立ち、今回パパは家族を残して一人で行くことになった。しかも、前日は普通通り出勤、試合が終わったらとっとと会場を後にして帰路につくという条件が付く。飛行機も考えたのだが、結局アムトラックの夜行便を使うことにした。これだと金曜の夜11時にDCを出て、土曜の朝8時前にチャールストンに着ける。帰りも、土曜の夜8時過ぎに現地を出て、日曜の早朝5時過ぎにDCに戻って来れる。金曜夜は子供を風呂に入れた後に出て、日曜朝子供が目を覚ます前に家に着く。剣道の試合は最後までしっかり出て、ママにかける負担は最小限だ。

こんな凄まじい日程、本当にスムーズにこなして試合でも好結果が出れば文句はないが、実際は世の中そう甘くはない。金曜夜は余裕を持って家を出たのに、途中の地下鉄の連絡が異様に悪く、DCのユニオン駅に着いたのがアムトラックの出発5分前だった。慌てて列車に飛び乗ると、乗客の層は航空便とは明らかに違う黒人中心で手元に置いている荷物の量が異常に多い。座席はそこそこの広いけれども、足を伸ばして座席を倒してもあまり寝心地は良くない。客層も座席も、これがグレイハウンドの長距離バスだったらもっと大変なのだが（それでも学生時代はよく利用したものだが）、オジサンになった我が身にはなかなかきつい。1時間遅れでDCを出発、途中ノースカロライナ州のどこかで1時間近く線路の上で立ち往生、結局チャールストンに着いたのは予定より2時間遅れの午前10時前だった。

慌ててタクシーで会場のシタデル州士官学校に乗り込むと、待ってましたとばかりに主催者が「審判を手伝って欲しい」と言ってきた。結局自分の出番が来るまで審判で立ち続け、足は棒だ。大会二週間前にジョギングで右足肉離れをやり、ロルフィングを受けて少し良くなっていたのに、列車の長旅とこの長時間の立ち仕事のお陰で、右足ふくらはぎが痛くて仕方なかった。それが理由というわけじゃないけれど、三段以上の部での初デビューとなった個人戦はさすがに一回戦延長の末ジョージアの瀬尾選手に一本負けを食い、ワシントン近辺の3団体混成チームで出た団体戦では、一回戦は5秒で二本勝ちを収めたが二回戦では瀬尾選手と同僚である李選手と対戦し、一本先取されて時間切れ、チームとしても三段以上の部の選手を3人揃えたジョージアチームに破れた。取られた二本はいずれも出端コテ。今は出端コテを気にせず大きくメンを攻めるよう心がけている時なので、まあ仕方がないか。

自分の出番が終わった後もしっかり審判は手伝わされ、決勝戦が終わった午後7時30分、慌てて会場を後にした。地元チャールストン剣道居合道クラブのチャックさんの車に乗せてもらい、駅に直行。定刻通りに到着したアムトラックに乗り込み、再び寝心地の悪い客車で一夜を過ごした。

結局、観光もクソもない、たった9時間のチャールストン滞在だった。実はチャールストンといえば南北戦争の発端となったサムター要塞が海上に浮かぶ古くからの港町で、それなりに見所も多い筈なのだが、そんなのを味わう余裕もなかった。今回アムトラックを経験したが、次は運賃が高くて寝台を予約して、家族連れで訪れても良いと思った。金曜か月曜が休みになれば、週末2日間を観光して過ごすには丁度良い町だと思う。それにDCと違って暖かった。(浩司)

パパの自己申告書(その4) 黙々と仕事こなして帰国しよ!

「サンチャイ通信」11月号の続きになるが、10月中旬からの約1ヶ月は生きた心地がしなかった。アメリカでの勤務にも関わらず、オフィスを出るのは平均すると夜9時、日本での勤務環境に比べればまだましだと思われるかもしれないが、周囲が皆帰ってしまった後の個室で一人黙々と作業をする虚しさといったらない。他のスタッフが普通に午後6時過ぎにはオフィスを退席しているのに、自分一人だけが残り、それでも仕事が減らない状況は、異常だと言わざるを得ない。言うておくが、残業したからといって残業手当が支給されるわけではないのだ。

スタッフへの作業を振るだけ振って、スタッフ一人一人がどれくらいの仕事を抱え込んでいるのかを把握していない管理職は非常に厄介だ。11月にはこんな出来事があった。翌週ノルウェー皇太子が世銀の某専務理事を訪問するので、その会談向けのブリーフィング資料を作りたいから協力してほしいと

の要請が、ある日専務理事のオフィスからうちの課長宛であった。課長は即座にその要請メールを私に転送し、翌日夕方迄に資料を専務理事オフィスまで転送するよう指示した。ここでの問題は、先月号で紹介したように、課長が私の担当国数が少ないことを問題視して追加の国を割り振った際、私は「ノルウェー」を受けることには同意していないという点である。とはいえ、専務理事のオフィスの担当者もお困りだろうからと思い、私は取りあえず我が課の共有フォルダーにあった最新のノルウェー関係資料を探し出し、「正式にはノルウェーは自分の担当国であると決まったわけではないが」という断り書きを付けて、専務理事のオフィスにメール送信した。当然うちの課長にも CC を送った。

2日経っても誰からも問い合わせがなかったので、用件はもう済んだと思っていたところ、3日目の朝、私が日本から来たミッションとの対応で1日席を外していた間に、うちの課長が、「自分が指示したノルウェーの資料提供を浩司がやっていない」とわめき散らして私のオフィスの周辺をうろついていたらしい。うちの課のアシスタントスタッフが、「あの指示が出てからすぐに浩司は資料を送っている」と言ってくれたのでその場は治まったようだ。ここでわかることは、うちの課長は指示は振っておきながら、その指示に対して部下がどのような作業を行なったのか全く把握していないということだ。部下が返信してきたメールを殆ど開けて読んでいない。以前にも、「急ぎだ」と言われて夜なべ仕事をしてその晩のうちに課長に打ち返した文書について、3日も経ってから呼び出されて「あれはどうなった？」と詰問されたことがあった。「3日前にあなたに送った筈だ」と私が反論したので、課長は慌てて私から届いたメールを確認しようとしたが、私から送ったメールが殆ど未開封だということを私は目撃してしまった。(そのくせ、私がメールのタイトルに「祖母急逝、日本に帰りたい」と書いた時には素早く反応していた。読んで欲しかったらメールのタイトルを工夫する必要があるということを学んだ。)

他にも、アイルランド経済協力担当相との協議会に伴う昼食会で、出席者の数よりも注文していた料理の数が少なかったことやワインを注文しなかったことを課長に怒鳴られたこともある。アシスタントスタッフが本来やるべき仕事ではあるが、確かに出席者数を口頭でしかアシスタントに伝えなかったり、アルコールの要否についてアシスタントから聞かれなかったのだからちゃんとやってくれているだろうとの思い込みがあったりして、自分自身にも反省すべき点はあるのだが、協議そのもののアレンジに対する評価はそっちのけで昼食会について「こんな貧弱なアレンジは見たことがない」と言われると、「昼食にワインを間違いなく注文するのが私の仕事なのか」とも言いたくなる。

こんな部署に自分の後任を JICA から送り込むことには反対である。上に書いたような仕事をそつなくこなしたからといって、JICA に戻ってからの自分の仕事の役には立たない。普通、「出向」と言ったら派遣元がある程度の費用負担をして、派遣元にとってもメリットのある仕事をやってもらうことが目的だと思うが、私の場合は、JICA は在勤手当を一切負担しておらず世銀から全て出ているので、JICA 職員である私にとって何のメリットもない仕事であっても、私は文句を言える立場にはない。ましてや JICA が直々にうちの課長と私の業務内容について話し合うこともない。巷間漏れ伝わるところによると、JICA は私の後任を派遣したいとの意向のようであるが、対日本関係の仕事にそこそこの時間を割くことすらできない現状を考えれば、JICA にとってこのような派遣にどれほどのメリットがあるのかは疑問だ。ましてや、JICA が費用負担をしていないばかりに、本意ではない仕事をやらされても文句の言える立場にはない職員自身が可哀想だ。どうしても JICA が後任派遣を考えたいのなら、それなりの費用負担をして、JICA にとってもメリットのある業務内容となるよう、JICA 自らがうちの課長としっかり話し合うべきだ。

この10~11月に自分が経験してきたような仕事が来年10月の任期終了まで続くとしたらかなり辛いと覚悟しておかなければならない。仕事をえり好みする立場にはないから、自分としてはこれまで通り投げられたボールは即座に打ち返すのみだ。後ろ指指されないよう淡々粛々と作業をこなし、さっさと日本に帰りたい。

ボルチモアに来て来て松井

この「サンチャイ通信」が読者の皆様のお手元に届く頃にはひょっとしたら松井秀喜外野手の去就は既にニューヨーク・ヤンキースで確定しているかもしれないが、敢えて書かせて欲しいことがある——「松井君、ボルチモア・オリオールズを救ってよ！」

昨シーズンのオリオールズ、8月上旬までは勝率五割前後と去年よりも健闘していたが、その後連敗に連敗を重ねてシーズン終了までに4勝しか挙げられなかった。問題は攻撃力にある。投手陣の踏ん張りでそれなりに頑張っていたが、投手陣に疲れが見え始める夏場に入っても打線が不発だったのが痛い。左の強打者が不在で、カムデンヤード球場の右翼席後方にある球団オフィスビルに豪快に打ち込まれる本塁打など一度も見たことがない。

今回一時帰国してみて、どこもかしこも松井はヤンキースに行くことが規定路線であるかの如き論調が目立つ。巨人軍の四番打者だから大リーグでも大都会の由緒正しき球団のクリーンアップを務めるのが当然だとの主張である。でも、ちょっと待って欲しい。あの「ヤンキースじゃないと行かない」とゴネた伊良部秀輝投手はその後どうなったかを考えて欲しい。ヤンキースからエクスポス、レンジャーズと渡り歩き、来シーズンは阪神入りだ。たとえヤンキースに入団できたところで、期待される成績が挙げられなければ即放逐だし、新庄剛外野手のように成績は上々でも球団の補強政策との兼ね合いでトレードに出されることだってあり得るのだ。

アメリカのプロスポーツはどれもそうだが、ドラフト候補は「どこそこじゃなきゃ行かない」などとは決して言わない。プロは結果が全て、個人主義が徹底しているアメリカでは、選手は自分が最も働く場を与えられそうな球団に入って実績を積み、さらに恵まれた契約条件を指向するのだ。「ヤンキースで骨を埋めたい」的な考え方は極めて日本人的だ。

松井君、カムデンヤードの右翼席後方のビルに豪快なホームランを打ち込んで、貧弱なオリオールズ打線を救ってやって下さい。そうして実績を積んで、現在提示されているよりもっと良い条件でヤンキースなりレッドソックスなりマリナーズなりに移籍して下さい。サッカーの中田英寿選手だって、セリエAの最初の所属先は最下位争いをしていたペルージャでした。ペルージャを強くしたことが評価されて、ローマやパルマといった上位球団に好条件で移籍できたのです。まずはボルチモアに来て下さい。そしたら来年はもっと応援に行っちゃおうよ！

編集後記～山田家短信

- 文中おわかりの通り、仕事の上では私は不満鬱積で爆発寸前の状態でした。祖母逝去で一時帰国をしていなかったら、感謝祭休暇まで自分が持ったかどうか自信がありません。元々一時帰国するつもりでいたのですから、祖母と最後の言葉を交わすことができなかったことは残念ではありますが、ちょっと変な言い方ですが、タイミング的には祖母には感謝もしております。感謝祭休暇明け後、仕事の窮状が劇的に好転するわけではないでしょうが、できないものは「できない」と言う勇気も持ちたいと思います。(浩司)
- 急遽一時帰国した後、戻って来たのは11月29日のことでしたが、出発時の東京の気温が6℃だったのに対し、到着日のワシントンは氷点下3℃でした。来月号で詳しく紹介しますが、12月5日には記録的な大雪となり、その後も気温が上昇せずなかなか雪が融けませんでした。さらに12月11日は「アイス・ストーム」といって、降ってきた雨が地上で凍り、木々には樹氷が形成され、軒や電線の氷柱がみるみる伸びてゆくという珍しい天候も経験しました。去年の今頃は薄着でいられたことも多かったのですが、この冬は寒くなりそうです。皆さんお体には十分お気をつけ下さい。(浩司)

パパの体重

84 kg

(12月10日現在)